

農業を新しいアイデアと実現力で盛り上げる人々を紹介するこのコーナー。第6回目は「江戸東京野菜コンシェルジュ」の福島さんです。

ネクストファーマー、ミズスタイル
命のバトンを「江戸東京野菜」
でつないでいく 福島秀史さん



第6回

江戸東京野菜コンシェルジュとは

「川口エンドウを知って味わってみよう!」という何ともピンポイントな講座、しかし、定員20名程の会場は満席です。川口エンドウとは東京・八王子市の川口地区でつくられてきた在来の品種。昭和30年代は盛んに栽培されていましたが、近年では激減し、3年前には生産者は1人だけとなりました(普及プロジェクトによって現在は9名まで増えた)。一般的なキヌサヤよりも大振り、えぐみの少ないこのエンドウが辿ってきたストーリーを語り、レシピまで提案します・・・というのがこの会の趣旨です。主催するのは多摩・八王子江戸東京野菜研究会。代表を務めるのが福島さんです。



川口エンドウ

都心で働きながら体は畑を求めている 福島さんは広告代理店の経営が本業ですが、同時に1反(10000㎡)ほどの畑を耕しています。「広告の仕事は好きですし面白くもあつたんですが、あくまでも相手の意向に合わせるのが仕事。自分で発案してゼロから作り上げることが少ないんです。」以前はサラリーマンとして満員電車で都心に通い夜遅くまでバリバリと働く日々でした。結婚し、郊外で暮らしながら都心に通う毎日の中でふと始めた野菜作りへのめりこんでいきます。「種と畑さえあれば、食べ物を生み出せる。仕事とは真逆の時間を畑で過ごすことができるんです。」その熱は次第にエスカレートし、知り合いの畑を手伝わせてもらいながら、徐々に畑の面積も広がっていきました。ゼロからイチを生み出すというところにこだわり、栽培品種の多くが固定種で種採りも自分で、肥料はほとんど使わず、乗馬クラブの馬糞たい肥だけを投入する徹底っぷり。毎日の出勤前に畑に通い、あるいは会社帰りに畑に寄って、広告代理店業と野菜作りの両立をしています。

高倉ダイコンとの運命の出会い

野菜づくり、その中でも自家採取可能な固定種にひかれていた福島さんは、ある日ラジオで「江戸東京野菜」という言葉を耳にします。伝統野菜が、東京にも!?!と激しく心を動かされ、早速、出演していた江戸東京野菜コンシェルジュ協会、会長の大竹道茂さんに会いに行きました。

「知られざる東京の伝統野菜」の可能性に魅せられ、すぐに協会のメンバーとなった福島さんですが、そこで運命の出会いを果たします。大竹さんと八王子に一軒だけ残る江戸東京野菜「高倉ダイコン」の栽培農家を訪ね、自分が暮らす街にも伝統野菜が残っていたことに感激した福島さん。その話を家に帰ってしたところ・・・実はそのただ一軒のこる栽培農家は奥様の近しい親戚であることが分かったのです。

「縁を感じました。固定種野菜の種というのは誰かが毎年栽培し、次世代につなげていかなければ消えてなくなってしまうものです。消えかけていた高倉ダイコンと出会って、命のバトンを次世代に繋げなければと強く感じました。」市場ではメジャーな品種に席巻されて衰退していった伝統野菜たちですが、知れば知るほど個性的な魅力にあふれているといえます。「オリジナリティ豊

かな個性派にもちゃんと居場所をつくってあげたい。これって人間社会にも言えることですよね。」

個性あふれる伝統野菜たちを次世代にバトンタッチしていく。江戸東京野菜の伝道師として、また、八王子に現存する高倉ダイコン・川口エンドウ・八王子シヨウガ、3つの江戸東京野菜品種の普及のため、プロモーションだけではなく加工品の開発などにも積極的に取り組んでいく予定です。



高倉ダイコンはタクアンや切り干し大根として使われてきた

福島秀史さんプロフィール

1965年4月24日 埼玉県所沢市出身

NPO法人江戸東京野菜コンシェルジュ協会理事

多摩・八王子江戸東京野菜研究会 代表。

食・農関連企業・団体の広告・プロモーションを主軸に活動。

また、東京の伝統野菜である江戸東京野菜の普及にも力を注ぎ地域おこしや学校での食育授業、生活者に向けての講演活動等を行っている。



文・小野 淳(おの あつし)

(株)農天気 代表取締役 農夫

東京・国立市を拠点に幅広い農サービスを提供

著書「都市農業必携ガイド」

DVD「菜園ライフ～本当によくわかる

野菜づくり」

My 偏愛 goods

多摩・八王子江戸東京野菜研究会
「オリジナルTシャツ」



もちろんデザインは福島さんご自身で、着た人は誰もが広告塔になれる仕組みです。